

原著論文

新体操と芸術の関係における一考察 —目的のスポーツと美的スポーツの区別の過ちについて—

浦谷郁子

日本体育大学大学院 体育科学研究科体育科学専攻 博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

Consideration on the relationship between rhythmic gymnastics and art —mistake on distinction between purposive sports and aesthetic sports—

Ikuko Uratani

Abstract: Rhythmic Gymnastics is a sport in which artistic aspects are included in the criteria for evaluation; however, as a sport it is required to decide on who has won and who has lost. Therefore, victory is clearly decided by objective evaluation. However, a subjective side to the sport also exists due to Rhythmic Gymnastics' incorporation of artistic values such as beauty, grace and sorrow combined with musical composition. The reality that the artistic evaluation of Rhythmic Gymnastics exists between objective and subjective decision makes it necessary to clarify the relationship between Rhythmic Gymnastics and art in order to find the principle of evaluation methodology.

The relationship between the beauty and artistic quality of sports has been repeatedly discussed in the field of sport philosophy from various perspectives. The purpose of this research is to clarify the mistakes regarding the distinction of sports in previous research discussing the relationship between sports and art thus far.

As for whether sports are art or not in the history of research, the attitude that sports are not art has been supported in sport philosophy. It was clarified that the sports that had been discussed in the research were mainly those that placed greater importance on achieving a goal, rather than the process of achieving that goal. Furthermore, these sports were regarded as purposive sports and the sports for which importance was placed on the process were regarded aesthetic sports. Therefore, despite the fact aesthetic sports also have their own purposes; these sports were understood to have no purpose. It was clarified that the problem was that the relationship between sports and art had been discussed with the understanding that aesthetic sports have no purpose.

(Received: October 14, 2014 Accepted: November 11, 2014)

Key words: Rhythmic Gymnastics, Artistic, Purposive Sport, Aesthetic Sport

キーワード：新体操, 芸術的, 目的のスポーツ, 美的スポーツ

1. 本研究の目的

新体操 (Rhythmic Gymnastics)^{注1)}は、フィギュアスケートやシンクロナイズドスイミングと同様に芸術的側面を評価の対象に含むスポーツである。新体操は、体操の1つとして位置づけられる。これはフィギュアスケートがスケート競技、シンクロナイズドスイミングが水泳競技と位置づけられるようなものである。スケート競技や水泳競技は、そのほとんどが、芸術的評価を重んじない。それに対して、体操は芸術的評価があるのが特徴である。その中でも新体操は、より芸術的な身体運動をすることによって誕生したものである¹⁾。新体操と芸術の関係は、歴史的背景からも欠かせないものであることが明らかである。そこで、

スポーツと芸術の関係を明らかにするために新体操に焦点をあて考察を深めることにする。

新体操は、スポーツとして勝敗を求められるものであり、その方法は難度と実施(実施の中には芸術的評価も含まれる)の2項目から審判団によって評価される。そのため、その評価方法によっては不合理な結果として扱われることもある^{注2)}。その点サッカーやバスケットボールは、素晴らしいパスや美しいドリブルなどの過程があるとしても美的なプレイによって結果が覆ることはない。これらの種目は、ゴールすることによって得点を得るように、明確な目的があるため結果による不合理さはない^{2), 注3)}。以上のことから、スポーツにおける美的瞬間は、ほとんどの種目において何らかの形で存在しうるだろうが、そこに芸術的評価がある

か否かによって勝敗の決定に違いが存在する。

新体操がスポーツである以上、客観的評価によって判断されることにより勝敗の決定が明確になる。それは上記に示したサッカーのゴールのような客観的な得点が評価されることと同様である。しかし、新体操は音楽のコンセプトにあった美しさや優雅さ、もしくは悲哀などの芸術的側面を評価の対象とするため、客観的判断ではなく主観的判断も存在することになる^{注4)}。つまり、客観的判断と主観的判断の狭間で新体操の芸術的評価が混同している現実において、評価方法の原理を得るためには新体操と芸術の関わりを明確に示す必要がある。

新体操における芸術性の混乱は、シドニー・オリンピック大会後の新体操採点規則改正により生じた³⁾。例えば、現在の新体操の難度要素は、柔軟性があることが素晴らしく美しいと思われている。その背景には、シドニー・オリンピック大会で銅メダルを獲得したアリーナカバエワ（以後カバエワと示す）の存在がある。カバエワは、柔軟性に富んだ身体を活かし、これまでとは異なるジャンプやバランス、ピボットの形を生み出した。それは当時、賛否両論あったものの次第に新体操界に当たり前のように浸透し、今となってはカバエワのような柔軟性がなければならぬほどまでになった。今や、世界で戦う選手にとって過剰なまでの柔軟性は欠かせないものとして位置づけられている。今日の新体操の芸術的評価の混乱の1つは、この柔軟性の重視ないし、過度の評価が混乱を生み出している。本来「柔軟」とは、適応の幅が広いという意味をもち、体そのものの柔軟性に加え、動きの変化に即応できることを示す一種の美的感覚である⁴⁾。すなわち、新体操の芸術的評価の混乱は、カバエワの適応以上の柔軟性と美を結びつけたことによって芸術的側面を持つとしたところである。それは、柔軟と美の関係性、さらに美と芸術の区別がなされていないことによって混乱が生じている。カバエワの柔軟性は、彼女の個性の1つと解釈されるべきであったのだが、その柔軟性をすべての新体操選手に客観的評価基準としたことによって柔軟性と芸術性の誤った結びつきを生み出してしまったのである^{注5)}。

スポーツにおける美・芸術の関係性については、これまでスポーツ哲学の領域でさまざまな視点から論争が繰り返されてきている^{注6)}。そのスポーツは、サッカーや陸上競技などの目的スポーツとされるものが大半である。本研究における新体操などの芸術的なものを評価の対象としているスポーツが論争されることはない。したがって、スポーツの中でも芸術的評価があるスポーツ、たとえば新体操は、芸術的評価を重んじるため、新体操と芸術の関係を正確に読み取る

ことが重要である。そのためには、まずスポーツの区別を明確にする必要がある。したがって、本研究の目的は、これまでのスポーツと芸術の関係を論じた研究におけるスポーツの区別の過ちを示すことにある。新体操と芸術の関係を明らかにする作業の中で、本研究によって明らかにされるスポーツの新たな区別は新体操の芸術的評価の原理論に位置づけられる。

2. スポーツとしての新体操

2-1. スポーツの分類

まず、スポーツと競技は混同されやすいが、必ずしも両者が同じ意味で使われるわけではない。スポーツは、身体を積極的に使っておこなうものであり、その成果を見せる場として試合への参加がある。その一方で、競技となると将棋やチェスなど身体と同様に頭脳を積極的に使ったものも含まれ、頭脳スポーツとしばしばいわれる⁵⁾。2つの違いは何を積極的に使うかの違いになってくるが、頭脳も身体といってしまうと将棋やチェスもスポーツの部類に含まれることになる。しかし、本研究で重要なのは頭脳を積極的に使っている競技ではない。

さらにスポーツは、するスポーツ、見るスポーツ、支えるスポーツなどに分類される^{注7)}。どのスポーツもパフォーマンスに何らかの関わりを有している。特に「するスポーツ」は、人間がスポーツの主体となる。本研究は広いスポーツ概念の中でも身体を積極的に使っているスポーツ、スポーツ競技、するスポーツに焦点をあてて考察を深めることになる。

するスポーツは、各スポーツの競技者が対象になる。競技者は、勝利を目指してパフォーマンス能力を向上させている。そのとき、重要な指針となるのが各競技のルールである。なぜなら、ルールに則っていないならば、各競技が目指す意図を読み取ることができないからである。各競技の意図は、競技の持つ特徴を最大限に活かしたものであることが求められる。しかし、ルールは文章で示されたものであるため、文章を正しく読み取ることが重要である⁶⁾。さらに、ルールに示されている文章を正しく解釈することは、試合の流れを有利にさせることになる⁷⁾。

スポーツにとって、ルールは不可欠な存在である。特に目に見えない芸術性を評価する新体操のルールは、より明確にその新体操の芸術を書きさなければスポーツ競技として混乱を引き起こすことになる。なぜなら、新体操は芸術的評価によって勝敗を大きく左右されるからである。スポーツの中でも新体操のような芸術的評価が組み込まれているスポーツは、美的スポーツとして親しまれることが多くある⁸⁾。それは、スポーツは芸術であるか否かの論争を繰り返してきた

ワーツとベストもスポーツの区別として目的的スポーツ（サッカー、陸上競技など）と美的スポーツ（新体操、フィギュアスケートなど）の2つを用いていることから明らかである。そのことによりスポーツと芸術を検討する研究者の多くは、ワーツとベストの区別にしたがって目的的スポーツと美的スポーツとを区別し、研究を行なっている。しかしながら、美的スポーツには目的的スポーツとしての役割も担っているのではないかという疑問を抱いた。そこで、次に目的的スポーツと美的スポーツの区別について述べたい。

2-2. 目的的スポーツと美的スポーツについて

本研究での焦点は、目的的スポーツと美的スポーツという区別の方法であり、それらを区別する利点はあるのかについて検討する。

美的スポーツとされる新体操の芸術の採点目的には、芸術的イメージの創造及び身体と手具によって音楽の特徴を表現することとある⁹⁾。さらに、演技構成は技術的、美的及び要素のつながりがなければならないとされている¹⁰⁾。新体操は喜怒哀楽の感情表現が美的であることが求められているのである。そのため、喜怒哀楽の感情を表出することと美的感情は、関係性があることになる。美は「快いもの」を示す¹¹⁾。それに対して、芸術は外的快感であり、必ずしも「快いもの」とは限らない。芸術は美しさや優雅さだけでなく、恐怖や悲哀など、さまざまな視点から描かれる観賞的価値を創出するからである。しかし、新体操の場合、スポーツであるがためにルールに則った芸術性でなければならない。そのため、新体操の芸術性は、恐怖や悲哀などを表現しようとも、そこに美「快いもの」を身体および手具にて表現しなくてはならない。一方、目的的スポーツは、ある目的に向かってそのスポーツを実施することである。その多くは、得点、ゴールといった目的を果たすことがそのスポーツを成立する指針となる。目的的スポーツは、もし美的要素があったとしても、感情表現によって起こるのではない。たとえば、美的感情と生命力を観客の立場から見た場合、樋口は陸上競技を参考に次のように示している。

運動は運動者の感情とは無関係の特別の課題であり、スポーツ運動によって人間の喜怒哀楽の感情を表すことはできない¹²⁾。

例えば走るという運動を考えてみても、走る運動そのものはその速度や走る場所の条件などによっていろいろな類型をもちうるが、陸上競技の走種目としてとらえられると、究極的にはより速くという一元的な目標

のみがめざされることになり、走る運動のパターンは限定される。したがって、種目特性によって限定をうけた一軍のスポーツ運動は、人間の喜怒哀楽の感情を表出して観戦者に同様の感情をひきおこすというのではなくて、運動そのものも独自の「感じ」を観戦者に受容させるのである¹³⁾。

陸上競技の目的は、その時、その瞬間に起きた結果や記録に対して美的感情が芽生えるのであり、より速くということである。陸上競技のフィールド競技は、理想とされるフォームで走り抜けることよりも、不格好でもより早く走ることの方が重要視される¹⁴⁾。陸上競技は、言うまでもなく表情と勝利との関係性をもたないのである。さらにベストは目的的スポーツについて以下のように述べている。

目的的スポーツには手段／目的の議論の区別がある。例えば、サッカーの特徴が少なくとも主に定義する目的、すなわち得点を入れる目的は、さまざまな手段によって成し遂げることができる。サッカーの監督が相手チームよりも自分のチームにより多くゴールを決める限り、その方法がどんなに不器用で格好悪くても大丈夫であることを伝えることは完全に理にかなっていることである¹⁵⁾。

サッカー、登山、陸上競技、オリエンテーリング、スカッシュを含むこれらそれぞれのスポーツにおける目的は、ルールや規範によって示す限界に従う限りその達成の方法を独立して具体的に明記することができる。例えば、アイガー登頂を果たすことやゴールを決めることである。このようなスポーツにさえも、もちろん実際にゲーム全体のパフォーマンス、特定の動きや運動は、その美的観点から考えることができる。しかし、これはその活動に対して主要ではない。これは、論理的なポイントであることが認められるべきである。例えば、サッカーという1つの活動がたとえそこにその美が関与してなかったとしても明らかにサッカーとして考えられる。対照的に、もしゴールをしようとしないのであれば、それはサッカーとして考えられない¹⁶⁾。

このように目的的スポーツについてベストは、その目指す目的が明確であり、観衆にも理解しやすいルールであるとしている。サッカーでいうならば、勝利することはゴールが多く入ることによって勝利することができる。このように、目的的スポーツは観衆にも親しみやすいルールによって勝敗が決定するのである。一方で美的スポーツについては次のように示している。

美的スポーツと芸術には手段と目的の間で有効な区別がない一方で、目的のスポーツの場合でそのような区別がある。その大部分から成る目的のスポーツは芸術でないことを示すことが十分である。しかしながら、これをサポートする他の論争もまたある¹⁷⁾。

スポーツと芸術の関係に関していえば、目的のスポーツよりも美的スポーツの方がスポーツと芸術に深い関わりを示している。美的スポーツは、「美的スポーツ」と示されることによって、目的のスポーツのような目的をもっていないように読み取られることがある。しかしながら、美的スポーツにも目的のスポーツと同様に目的自体は存在するのであり、両者の目的の違いはどこにあるかといえば、芸術的側面があるか否かである。

芸術的評価があるスポーツは、その芸術的評価に対して混乱が生じることが多くある。たとえば、新体操の芸術的構成におけるルール説明には、①構成の統一性②音楽と動き③身体表現の特徴④空間の使用(多様性)によって評価されるのだが、それは果たして新体操の芸術を読み取ったルール説明になっているのか疑問がある。なぜなら、新体操の芸術的意図がこの4項目に集約されているとは限らないからである。こうした根本的な疑問を問うことなく芸術的評価がルールに反映されたことによって、新体操の芸術的評価は混乱したのである。ワーツは「芸術的」である事の意味の多様性についてフィギュアスケートとテニスの例を以下のように示している。

フレミング、クランストンやキャリーが、スケート会場で観客にふるまうことで不幸であるとするのであれば、観客が3人の状況を理解してないからである。彼らにとって、スケートリンクはもはや単なるリンクではない。なぜなら、ダンス場は芸術の舞台と同じだからである。おそらく観客(審判)は、演技者たちが活動をもはや競技やスポーツとして理解しているのではなく、芸術として理解していることがわかるように意識を与える必要がある¹⁸⁾。

美的コントロールの同じ条件は、ローンテニスチャンピオンシップにおいて成し遂げられることに期待される。テニスに関して、その媒体である芝生上での身体は、各選手によって克服(=美的コントロール)しなければならない。各スポーツは、その活動が「芸術的」とみなすことができるとき、それが独自のきっかけになる¹⁹⁾。

フィギュアスケートのような美的スポーツは、喜怒哀楽を表現する芸術的意図がそのスポーツ競技の背景として成立しているため、スポーツでありながら芸術的側面があることを示している。それは時に、目的のスポーツにも同じようなことが起こるが、目的のスポーツが芸術的とみなされる場合の条件としては、美的なプレイによってのみ芸術的と判断されるのである。また、目的のスポーツと美的スポーツであっても、そのスポーツを成し遂げることに美しさがあることからスポーツと芸術には何らかの関係があるとしている。つまり、スポーツは目的・美的側面を備えたスポーツであるといえる。これらを切り離すことはできないのである。

スポーツは、さまざまな形式で多くの競技が存在する。そこでは、人間の限界を超えた動きが最大級の目標にある。陸上競技でいうならば、世界最高タイムを目指すといったことである。一方で新体操は記録として限度のない評価はなされないが、美的スポーツの中でもフィギュアスケートは得点に限度のない採点方法になったため、世界最高得点といった記録が生まれている。その得点は、ルール改正ごとに多少なりとも採点方法が異なってくるため参考までの最高得点とも考えられよう。それに対して、目的のスポーツはシューズやウェアの開発で多少記録がのびるにしても、大部分が人間の身体的条件によって記録が更新される。

以上のように目的のスポーツと美的スポーツは、異なる特徴が存在する。そこでのキーワードとして考えられるのは、芸術的側面が勝敗の対象となるか否かである。美的スポーツにも目的があり、目的のスポーツにも美的側面がある。そこで、目的のスポーツと美的スポーツに分けることによって生じる芸術的評価の有無について検討を加えたい。

2-3. 芸術的評価の有無

スポーツと美についての研究と同様に、スポーツと芸術についての研究もなされている。スポーツと芸術の関係についての問いは、ベスト、ワーツ、樋口に限らない。たとえば井上²⁰⁾は、スポーツの中でも武道に特化し、スポーツと芸術についてスポーツ社会学の視点から検討している。武道は、対戦スポーツであるため目的のスポーツによく似ているが、その判断は美的スポーツとも似ている部分がある。たとえば、柔道の1本を判定するのは審判の判断次第である。それは時に疑問を抱く結果を引き起こすことになる。しかし、武道は対戦する相手との技の掛け合いによって試合が成立するため、その判断が技の判断に留まるのである。そこに芸術的評価は加わらないことから、芸術的評価があるスポーツより評価の判断は決定しやす

い。それでも、柔道では、投げ方によっては1本にならないことから、採点競技のような目に見えない審判員の方々に共有される認識が存在することを考察する必要があるかもしれない。

また、滝沢²¹⁾は、題名の通り『競技・芸術・人生』の結びつきがあるとしている。そしてその中でも人生があつての最善の競技・最美の芸術であることを述べている。豊かな人生をおくることは人間の最大の目的である。そのため、人生における生活・社会を正しくおくる方法として、競技・芸術があることになる。滝沢はそのことをスポーツ競技や囲碁や将棋のような競技によって考察している。人生をおくるうえで欠かせない人との関係性といった意味で、対戦型のものを中心として考察しているのかもしれないが、ここでも芸術的評価があるスポーツについて述べられることはなかった。

以上のように、スポーツと芸術の考察には芸術と美の関係性があることがわかる。その中でも、本研究では、ベストとワーツの論争に焦点をあてて考察を進めることとする。なぜなら、ベストは、「スポーツは芸術ではない」という一方で、ワーツは「芸術としてのスポーツ」の存在を明らかにし、スポーツと芸術の関係の深さについて論じているからである^{注8)}。そこで論じられたスポーツと芸術の問いの中心には、目的のスポーツが謳われている。たとえばベストは、目的のスポーツが世間一般のスポーツとして親しまれていることから、目的のスポーツを中心にスポーツと芸術の論を展開したのである²²⁾。しかしながら、そこでの目的のスポーツはサッカーや陸上競技といった目的やゴールが明確に示されたスポーツだけを示している。ここで、美的スポーツとされる新体操やフィギュアスケートに目的はないのだろうかといった疑問が生じる。そのようなことは決してない。なぜなら、新体操やフィギュアスケートも勝利するための目的があるからである。

芸術的評価のないサッカーや陸上競技と芸術的評価があるスポーツとの相違点は、勝利するための目的やゴールに向かう過程があるか否かである。サッカーや陸上競技を目的のスポーツ、新体操やフィギュアスケートを美的スポーツと区別することは、目的と美や芸術を区別していることになるため、新体操やフィギュアスケートに目的がないことを示すことになる。しかしながら、新体操やフィギュアスケートはスポーツ競技であることから、勝利するための目的がある。

以上のように、ワーツとベストによるスポーツと芸術の検討は、目的のスポーツに分類されているサッカーや陸上競技の方がスポーツとして主流とされたがために、新体操やフィギュアスケートに特化して検討

されることはなかった。言い換えると、スポーツと芸術の関係を考察するのであれば、芸術的評価が存在する新体操やフィギュアスケートに注目して考察すべきであると考えられる。美的スポーツも目的のスポーツであり、さらに、新体操やフィギュアスケートは評価の対象に芸術的側面があるため、これらのスポーツに重きをおくことにより、よりスポーツと芸術の関係の考察を深めることができるであろう。

3. 芸術的評価があるスポーツ

スポーツと芸術の関係は、単発的な動作だけで評価されるものではない。たとえば、サッカーの目的であるゴールが決まることは、その前のパスの流れが止まったとしても評価されるため、芸術的側面ではなく美的なものとして客観的に判断されるのである。それに対して新体操は、単発的な動作である難度要素の評価に加えて、その要素と要素のつながりが音楽の始まりから終わりまで途切れることなく実施されているかを評価するため、客観的判断及び主観的判断の2つの判断によって評価されるのである。このように、スポーツでありながら主観的判断のある新体操は、身体動作などによって芸術的表現を行っているといえる。ベストは、スポーツにおける客観的判断と主観的判断について体操とダンスを例に以下のように述べている。

美的スポーツは方法と目的を区別することの不可能なことにに関して芸術と同様であることが示されている。これが意味するのは、そのような美的スポーツは芸術形式として合法的にみなすことができる意味をなしているのだろうか。私は2つの理由から同一視できないと主張したい。1つ目にわれわれが示してきたように、そのほとんどが美的スポーツの点にさえ達するけれども、方法と目的の区別を非常に不適切になるかどうか疑問に思う良い理由がある。これはダンスとは違うこれらの(美的)スポーツにおいて、例えば体操選手は彼が達成しようとするところの方法から離れて達成しようとするのを完全に特定するのは不可能であるとしても、外的に区別できる目的がなおある。おそらく一部の身体教育者は、むしろ彼らが漠然と体操とダンスの間で区別するためには、ダンスが主観的である一方で、体操は客観的であると言う時点にまで達している²³⁾。

換言すると、ベストはスポーツに美があつたとしても決められた要素をこなすことの方が重要としているため、スポーツは客観的なものであり、それは芸術的でないことを示すことになる。それは、芸術的評価を要して

いる採点競技も同じであるとしている。しかし新体操は、そこに芸術的要素がなければ競技として成立しないのである。よって、根本となるスポーツの区別を目的のスポーツと美的スポーツにしたことに誤りが生じていることに加え、芸術的評価があるスポーツについての考察がベストにおいては不十分であることがうかがえる。たとえば、ベスト論を基盤に研究を進めている樋口は次のように述べている。

芸術的であるとしても、ただちに芸術であると言うことはそこにはできない。体操競技やフィギュアスケートにおいて、どのように演技を構成していくかというような、あたかも芸術創作と似たような要素があるとしても、そこには実践者の感情を表現していく芸術的構想などはありはしない。彼らのめざすのは、個々の技をより完璧に遂行し、演技全体としてもより高い得点が与えられるようなパフォーマンスを提示することだけである²⁴⁾。

スポーツと美と言った場合、通常思い浮かべるのは、女子の体操やフィギュア・スケートなどの華やかな演技であろう。さらに、ランニング・フォームの美しさなども加えられるかもしれない。今ここで問題にしている美の概念は、美学という学問の観点からのものであり、したがって、感性的直観にうたえて直接に体験される価値内容とでもいったように、かなり広く捉えられなければならない。もし、スポーツの美を体操競技やフィギュア・スケートなどの演技の問題に限定するとすれば、それはスポーツの個別種目の技術的な問題という性格を強く持ち、スポーツの美学などという総括的な試みは意味を成さなくなる²⁵⁾。

ここでは、美の概念を美学の観点から考えるという主張であり、美の概念を芸術的評価とは関係していないことを示している。確かに、美に芸術があるとは限らない。しかし、芸術には美が存在することがあるのではなかろうか。たとえば、モネの『睡蓮の池』は美しく、芸術的な名画である。一方でゴッホの『ひまわり』は、人によっては美しいと感じないが、芸術的であると高く評価された名画である。芸術には、美しさがなくとも芸術的であると評価されることがある。だが、スポーツの場合は、美的要素が組み込まれた上での芸術性であることをいっておきたい。なぜなら、客観的判断によって評価される難度要素が存在するからである。難度要素については、これまでも述べてきたが、決められた動作をより明確に実施することによって評価されるのである。難度要素は、新体操の普遍的

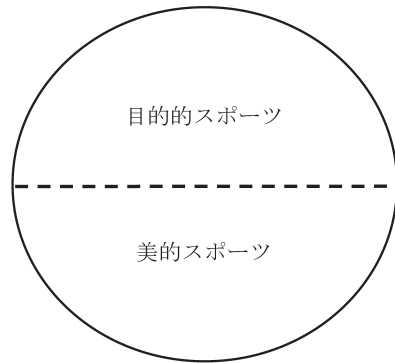
な美的判断材料とも考えられる。普遍的な美である難度要素がある限り新体操の芸術的判断には、美的要素が付随された芸術でなければならない。

芸術的評価があるスポーツは、それぞれの競技が提示する芸術性に則ったパフォーマンスでなければ高い得点を得ることはできない。その芸術性が芸術的側面を加味したルールであるかによって、そのスポーツの芸術性は評価することができる。しかしながら、今日の新体操における芸術の評価は、ルールに記載された芸術性に疑問があるために、採点に混乱を引き起こしている。また樋口は、スポーツと美について美的スポーツを真っ先に思い浮かべるとしながらも、それらを中心に検討しない理由としては、スポーツを偏って考察することになるためと述べている。しかし、パフォーマンスの過程が勝敗とは結びつかないサッカーや陸上競技を検討したところで、その考察によってスポーツと芸術の関係性を読み取ることは困難である。なぜなら、競技スポーツの中でも、それぞれ目的の意図が異なるからである。競技スポーツの区別は、目的だけを重んじるのか、目的及びその過程をも重んじるかの違いになってくる。

スポーツと芸術についての研究は、2-3で示したようにワーツ、ベスト、樋口に限らず、井上や滝沢も述べてきている。しかしながら、これらの研究の中心となるスポーツは、芸術的評価があるスポーツではなかった。これらの考察は、過程を重んじないサッカーや陸上競技などに焦点をあてていることからスポーツと芸術が結びつきにくいのが通常である。なぜなら、それらのスポーツは、限りなく芸術的側面が少ないからである。むしろ、それらスポーツは、芸術的であることが求められていないがため、芸術的側面に特化して各スポーツをすることに意味を持たないのである。こうしたことから、過程を重視しない、すなわち芸術的評価を有しないスポーツを例にスポーツは芸術であるかを問うことは、問いそのものがふさわしくないと見える。そこで、芸術的評価があるスポーツに焦点をあて、スポーツは芸術であるかの考察を深めることが新体操における芸術的混乱に対して原理的な解答を与えることになる。

これまでのスポーツと芸術についての考察は、大きな枠組の中でスポーツとされたことによってスポーツと芸術の関係に明確な見解を導いていないことがいえる。さらに、スポーツを目的のスポーツと美的スポーツのように誤って区別したことは、スポーツと芸術の考察に混乱を引き起こしていることが明らかとなった。そこで、これまでスポーツと芸術論の中で使われてきた「美的スポーツ」ではなく、「芸術的評価があるスポーツ」と対象の名称を改め考察を深めることで、

<ベストの示すスポーツの区別>



<筆者の示すスポーツの側面>

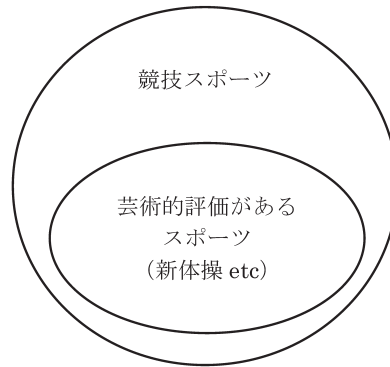


図1. ベストと筆者におけるスポーツの区別の相違

スポーツと芸術の関係性の整理を試みることになる。そのときベストが

世間一般のスポーツや少なくともそれらのスポーツが美的要素を除去できないような芸術の形式として、スポーツを正当とみなすことができるかどうかの問題をよく検討しなければならない。この観点の議論は、芸術と美の間の区別の意義を認めないことによって混乱させられていることが示めされるだろう²⁶⁾。

と述べているように、スポーツにおける芸術と美の区別の検討が必要である。本研究では、ベストらが言うように芸術と美の区別の整理をすることに同意しながらも、そのスポーツの枠組み(目的のスポーツと美的スポーツ)に疑問を抱くこととなった。以上のことから、ベストらが区別する目的のスポーツと美的スポーツに区別するのではなく、すべてのスポーツが目的・美的スポーツの側面を有していること、その中の1つとして新体操やフィギュアスケートを芸術的評価があるスポーツと定義したい。

4. ま と め

これまでの研究史の中でスポーツが芸術であるか否かについては、ベストならびに樋口の論に代表されるように芸術でないとする考えがスポーツ哲学の中で支持されてきた。その対象となるスポーツは、目的を達成する際の過程を重要視しないスポーツを中心に検討されていたことが明らかになった。さらに、それらのことを目的のスポーツとし、過程を重んじるスポーツを美的スポーツとしたことにより、本来美的スポーツにも目的があるにもかかわらず、目的がないような解釈によってスポーツと芸術の関係性を検討してきたことに問題があることが明らかとなった。

目的のスポーツは、勝利という目的を果たすことが重要である。そのなかでもサッカーや陸上競技などのように目的達成に対する過程を重視しないスポーツが、その過程を得点の対象とするならば、その競技の勝敗に大きな混乱を呼び起こすことになる。たとえばサッカーにおいて過程が重要視されるならば、何人もの選手を交わしながらドリブルをする行為にも得点を与えるべきであるが、そこに評価を加えることは難しいことである。こうした行為は結果に結びつくような評価はなされないが、MVPやフェアプレイといったスポーツマンシップの精神をもって闘うことで自由と平等、競争と連帯、自発性や主体性、規則や秩序の結びつきにくい価値を成立させるという、勝利とは別の評価がなされる²⁷⁾。これはどのスポーツにも共通していえるものである。

以上のことから、スポーツのすべてが目的のスポーツであることが明らかである。しかしながら、目的のスポーツでありながら目的という単一の観点のみでは語れないスポーツが存在する。それが、芸術的評価があるスポーツである。それは、目的達成もさることながら、その過程についても重要視されるスポーツである新体操やフィギュアスケートを代表的な例として考えることができる。たとえば、新体操で言うならば、難度と難度のつなぎとされる過程も評価の対象とされるため、目的のだけではそのスポーツの特徴を捉えることができないのである。このことについてベストは一貫した考えを持っている。すなわち目的のスポーツの意図は、目的を達成することであってその方法は重要ではないとする一方で、美的スポーツは目的達成とその方法(要素と要素のつなぎ)も重要であると示している²⁸⁾。その評価には何かしらの意図があるはずである。その意図は果たして何なのか。それが明らかにされればスポーツに美的、芸術的なものが含まれているか否かについてより明確に考察できる。

以上のことから、ワーツやベストのスポーツの区別は誤っていたことが指摘でき、その方法によってはスポーツと芸術の関係性を明確にできないといえる。そこで、本稿ではスポーツを目的的スポーツと美的スポーツで区別するのではなく、1つの競技スポーツとして融合させた。その競技スポーツの1つとして芸術的評価があるスポーツが存在することになる。これらの考察によって、芸術的評価があるスポーツは、目的的要素と芸術的側面のどちらも備わっていることから、スポーツと芸術の関係を示唆することができる2つの分類方法によって、今後、新体操における芸術的評価の混乱の解決において糸口が開かれると思われる。

注

- 1) 本研究の根源は、新体操採点規則における芸術的評価の問題である。その新体操採点規則の英語表記は“Code of Points Rhythmic Gymnastics”である。本研究では、新体操を英語で表記する場合、新体操採点規則に基づいて“Rhythmic Gymnastics”と示すことにする。
- 2) 芸術性に定評のあるアンナベッソノワ（以下ベッソノワと示す）は、2009年世界新体操選手権において完璧な演技をしたのにもかかわらず、ミスのあったエフゲニワカナエワ（カナエワは身体難度に定評があり、カバエワが引退したあとにあらわれたロシアの新星であった。）に破れたのである。そのとき会場では、ブーイングが起きる騒ぎとなった。ベッソノワは、2009年世界新体操選手権大会、2008年北京・オリンピックにおいて3位の成績を残しているが、その結果は誰もが納得できるものではなかったのである。この現象こそ、美的スポーツと芸術の関係が混乱している様を物語っている。
- 3) ベストの文献の“The Aesthetic in Sport”は、1974年にイギリスの美学雑誌に掲載されたものだが（Best D. (1974) The Aesthetic in Sport. British Journal of Aesthetics, 14(3): 197-213）、その後、単行本の一部にさらに論を深めたものを掲載している。そのため本研究は、後に掲載されたものを参考に引用する。
- 4) 本研究における客観的判断は、哲学的思考に基づき使用する。特に本研究は、カントの『判断力批判』における客観的判断を中心に用いることになる。カントは、「美」を示すとき、客観的、普遍的であることを示している。われわれは、花を見て美しいと感じるように、そこには普遍的な美が存在する。それは客観的判断に基づくとも考えられる。スポーツにおける普遍的な考えは、勝利することが挙げられるため、スポーツにはルールが必要不可欠である。すなわち、スポーツにおけるルールは、普遍的客観性に基づいていなければならないことになる。これらのことから、本研究は、美やルールを客観的なものとして位置づけることにする：カント：篠田英雄（1964）判断力批判（上）。岩波書店、東京。
- 5) カバエワの事例は、一人の人間の新たな試みが、技術として一般化されたのである。彼女の柔軟性が一般化されたことにより、新体操は柔軟性をより重要視する

ようになり、やがて、柔軟性がなければ美しくないと誤った解釈が起きたことが本研究の問題点である。

- 6) 本研究におけるスポーツにおける美・芸術の関係は、ワーツとベストを中心に考察している。ワーツの“Context and Intention in Sport and Art”は、スポーツと芸術の関係性を背景と意図で示している。この論についてベストは“The Aesthetic in Sport”にて、背景については否定的だが、スポーツと芸術の関係に意図を用いることを周知している。その他には、ワーツとベスト論争において「スポーツは芸術か」を問うている樋口の『遊戯する身体』や『スポーツの美学』がある。また、カントは『判断力批判』において、美を客観的判断であると位置づけている。この思想は、スポーツ哲学でも用いられることがある：Wertz S. K. (1988) Context and Intention in Sport and Art. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 523-525; Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 477-493; 樋口聡（1994）遊戯する身体。大学教育出版、岡山；樋口聡（1987）スポーツの美学。不味堂出版、東京；カント：篠田英雄（1964）判断力批判（上）。岩波書店、東京。
- 7) 文部科学省は「スポーツ立国戦略の目指す姿」の1つに、する・みる・支えるスポーツの重要性を掲げている。ここでは、日常的にスポーツに親しみ、楽しむ、そして支えることによって、スポーツを育てると示している。またスポーツの目的としては、トップアスリートだけではなく、すべての人が親しむ権利をもち、スポーツによって豊かな日常生活を目指すことを挙げている。本研究は、新体操を競技するとき起こる問題を中心に考察することになるため、するスポーツの中でも「採点競技」に焦点をあて考察を深めることになる：文部科学省、スポーツ立国戦略 基本的な考え方、文部科学省ホームページ、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1297207.htm, (2014年11月9日)
- 8) ベストは、「スポーツは美である」と示すことによって、スポーツは芸術ではないと指摘している。一方でワーツは、スポーツによっては芸術があると示している。そのためには、そのスポーツの背景と意図に芸術的要素が組み込まれていることが求められている。たとえば、体操場以外でダンスをしても、そのダンサーが体操ではなくダンスをしているとすれば、どんな背景であろうともダンスなのである。ワーツは、どの行為が何であるかを決定するために背景以上のものを求めており、それが意図である。すなわち、正しいしきりや制度を選択する役割として意図を用いることが望ましいとしている。しかしワーツは、すべてのスポーツと芸術が関係するとは示せないことから、「スポーツは芸術」と示すのではなく「スポーツとしての芸術」によってその関係性を導き出している：Best D. (1985) Sport Is Not Art. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 527-539; Wertz S. K. (1988) Context and Intention in Sport and Art. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 523-525

文献

- 1) 岸野雄三 (1987) 最新スポーツ大辞典. 大修館書店, 東京: 448
- 2) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 480
- 3) 渡部愛都子 (2009) 新体操はスポーツか芸術か. 幻冬舎ルネッサンス, 東京: 123-127
- 4) 勝部篤美 (1972) スポーツの美学. 杏林書院, 東京: 29
- 5) 樋口 聡 (1994) 遊戯する身体. 大学教育出版, 岡山: 49-51
- 6) ウルリヒ ゲーナー: 佐野淳・朝岡正雄 (2003) スポーツ運動学入門—スポーツの正しい動きとは何か—. 不味堂出版, 東京: 75
- 7) 樋口 聡 (1987) スポーツの美学. 不味堂出版, 東京: 67
- 8) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 481-482
- 9) 新体操委員会 (2013) 新体操採点規則 2013-2016. 日本体操協会, 東京: 20
- 10) 新体操委員会 (2013) 同上書: 20
- 11) 勝部篤美 (1972) スポーツの美学. 杏林書院, 東京: 19
- 12) 樋口 聡 (1987) スポーツの美学. 不味堂出版, 東京: 85
- 13) 樋口 聡 (1987) 同上書: 85-86
- 14) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 483
- 15) Best D. (1985) Sport Is Not Art. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 531
- 16) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 480
- 17) Best D. (1988) Ibid. : 481
- 18) Wertz S. K. (1988) Context and Intention in Sport and Art. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 525
- 19) Wertz S. K. (1985) Aesthetic Creativity in Sport. Vanderwerken D. L. and Wertz S. K., Texas Christian University Press, Fort Worth: 517
- 20) 井上 俊 (2000) スポーツと芸術の社会学. 世界思想社: 京都.
- 21) 滝沢克己 (1961) 競技・芸術・人生. 内田老鶴園: 東京.
- 22) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 480
- 23) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 486
- 24) 樋口 聡 (1987) スポーツの美学. 不味堂出版, 東京: 108
- 25) 樋口 聡 (1994) 遊戯する身体. 大学教育出版, 岡山: 132
- 26) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 477
- 27) 井上 俊 (2000) スポーツと芸術の社会学. 世界思想社, 京都: 12-13
- 28) Best D. (1988) The Aesthetic in Sport. William J. M. and Klaus V. M., Human Kinetics Publishers, Champaign: 477-493

〈連絡先〉

著者名: 浦谷郁子

住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属: 日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻
博士後期課程スポーツ文化・社会科学系

E-mail アドレス: ikuko_u5ikuko_u5@yahoo.co.jp